

## 『大般涅槃經集解』における僧亮の教判思想

菅野博史

『大般涅槃經集解』（以下『集解』と略称する）は、卷第二以下の随文解釈において、実に十九名の多数にのぼる注釈者の注を編纂している。諸注釈者のなかで最も時代の古い人は竺道生（？―四三四）であり、その次に古いと推定されるのが僧亮である。『集解』は『南本涅槃經』を二千八百六十四の經文に分節しているが、僧亮の注は、二千百三十箇所に採用されており、他の諸師にくらべて最も多い。<sup>(3)</sup>本稿は、この僧亮の注を資料として、彼が涅槃經を積尊一代の經教のなかでどのように位置づけているのかを考察することを目的とする。はじめに、比較的詳しく積尊一代の經教を分類した資料を検索すると、次の三つが注目される。

①如來、始自道場、終於双樹、凡三說涅槃。二是方便、一真実也。初開三究竟、是一方便。但說解脫是涅槃、而身智是有為也。二方便中、說法華破三究竟、身智故是有為耳。今双樹之說、身智即涅槃、謂究竟無余之說也。<sup>(4)</sup>

②金鐺、譬諸經教。一指、譬三乘諸經說三涅槃。実欲顯一常住涅槃。

譬。文隱義微、譬一指也。二譬法花破二涅槃。一乘雖顯、常我未明、譬二指也。三指者、譬今日仏性常樂之說。<sup>(5)</sup>  
③仏教從小起。牛譬仏也。乳譬三藏。酪譬三乘雜說也。生蘇譬方等。熟蘇譬說空般若。醍醐譬涅槃經法也。<sup>(6)</sup>

①は經序において説かれ、『集解』編纂者が諸師の經序を八科に整理する中の「覈教意」に採録された部分である。釈尊の説法の始終を視野に入れたうえで、全部で三回、「涅槃」が説かれたとする。そのうち、はじめの二回は方便とされる。第一回の説は三種の究竟を説いたことで、これは②の注を参照すると、三乗の諸經において三種の涅槃を説いたことを意味する。三種の涅槃とは、声聞、縁覺、菩薩の三乗がそれぞれ達成するたがいに異なる三種の果報（阿羅漢、縁覺、仏）のことである。この段階の教えでは、解脫が涅槃であると説くだけで、身と智は有為（無常變化する存在）であって、涅槃の内容として位置づけられていないから方便なのである。第二回の説は、法華經において、前述した三究竟を破ること

(究竟<sup>⑧</sup>涅槃が三種あるとする考えを破ること)である。しかし、身・智は第一回の説と同様、もとより有為であるから、方便とされる。第三回の説は、涅槃經の説で真実とされ、解脱のみでなく法身、般若も涅槃の内容として説かれており、究竟無余の説とされる。これを要するに、僧亮は釈尊一代の經教を、法華以前の三乘教、三乘を破して一乘を顯わす法華經、涅槃經の三段階に分けていることがわかる。このことは②において同様である。

②の説明は割愛して、③について述べる。③は有名な聖行品の五味の譬喩に対する注である。僧亮より後輩の僧宗、宝亮が、この譬喩に対して明らかに五時教判を展開しているのにくらべると、僧亮の注は、三藏、三乘雜説、方等、空般若、涅槃經法と、仏教は小乗からはじまるとしたうえで、釈尊の説法を五段階に分類しているものの、具体的な經典の配当について明瞭を欠き、また法華經の位置づけには全く論及していない。したがって、僧亮の場合は、經文の五味を解釈する必要上、五段階の教えを設定したが、後に発達する頓漸五時教判とは大分隔りがあると結論できよう。

では次に、三段階、あるいは五段階に分類された經教の相互関係についてはどのように考えられていたのか。これまでの引用からも十分推定できることであるが、浅い教えから深い教えへと、漸次に經教が深化すると考えていた。これを明

『大般涅槃經集解』における僧亮の教判思想(菅野)

示する資料として次の二つを掲げておく。

④ 如来教法、先淺後深、唯涅槃究竟、無惑不除也。

⑤ 一切諸仏、皆具淨穢二土。仏在惡土、開三乘教。先淺後深、漸除諸惡。故名藏也。

釈尊の説法を浅い教えから深い教えへと展開すると見る考えは、後の頓漸五時教判とまったく同じ視点であり、注目すべきである。では、浅から深へという視点が、具体的な經典の優劣比較に適用されているかといえ、その資料はほとんどないが、すでに引用した②において、「一乘雖顯、常我未明。」と述べているのは、言うまでもなく、法華經と涅槃經の比較を意味する。また、「昔說契經、具二種。如法華中說一解脱、是無余也。復倍上數、是有余也。」も、『法華經』壽量品の「復倍上數」が有余(不完全)であることを指摘したもので、涅槃經の仏身常住説を意識した表現であることは明らかであり、この点も後の五時教判と共通する着眼点である。これまでの論述から明らかのように、僧亮は涅槃經を最高の教えと捉えているが、その思想内容に対する捉え方は、

⑥ 諸經所不論者、其旨有三。何者、一曰常住。二曰一体三宝。三曰衆生悉有仏性。然常住是經之正宗。余二為常故說耳。

という序品冒頭の注に最もよく表現されている。この涅槃經を最高と捉える視点から、僧亮は、前述したような釈尊の一代説法を三段階、あるいは五段階に分ける考え方よりも、涅

槃經とそれ以前の經とを、「今」と「昔」として二大分する考え方を多く示している。もちろん、涅槃經自身がしばしば過去の教えと涅槃經の思想とを対比させて述べていることによることは言うまでもない。そして、⑥の引用で見たように、僧亮は涅槃經の中心思想を仏身の常住と捉えることから、今昔の兩説を対照させる一つの大きな観点として、常と無常とを取りあげている。たとえば、「昔説無常、覆今常旨、謂之密教也。」<sup>⑩</sup>「上勸疑問、今開疑宗。何者、昔説從凡至仏皆是無常。今云施常。言与昔乖、理応疑向也。」<sup>⑪</sup>「入者、常住之理、昔為無常所覆。」<sup>⑫</sup>「自知生死未尽、不知仏果常、故為昔言所覆也。」等とある。涅槃經では昔の無常説が批判されるとともに、その一定の役割が認められるのであるが、僧亮も昔説の一定の役割を認める注を残している。また、常と無常との対照以外には、涅槃經の所説に依じて、空と不空、無我と自在、五陰がすべて苦であるかどうか、八聖道が道諦であるかどうか、をめぐって今昔の兩説が対照的に扱われ、中には兩説の矛盾性を強く提示する表現もみられる。<sup>⑬</sup>

また、今昔の兩説について、常、無常などの具体的な教理を示す概念で対照させるのではなく、偏教、円教という思想の全体的評価にかかわる概念を用いて表現することもあり、注目される。すなわち、

⑦昔日偏教、説仏無常。密筌於常。惑者失旨、慧命不生。是為魔

道。今円教既開、能生円解、終成大覺、是天道也。<sup>⑭</sup>

⑧菩薩既去、円教亦隱。小乘以無我為化。偏教失中、譬謗也。<sup>⑮</sup>

と。この偏・円によつて、今昔の兩説を規定する考え方は、仏が沙羅双樹の間で二月十五日に涅槃に入るといわれる場所と日時についての解釈のなかにも適用されている。「沙羅双樹」については、

⑨方有二樹。……中略……今以二樹鮮榮二樹枯悴、明法不偏也。

昔道場説、所以一樹。今日教円、寄之双也。<sup>⑯</sup>

とあり、「二月十五日」については、

⑩彼土、唯立三時。謂春夏冬也。二月是春和之中節。異耶。冬夏寒暑、偏也明也。昔談苦空、如彼之偏。今既三理双顯、故取表於中和也。<sup>⑰</sup>

とある。また、僧亮は「仏所説義、有権有実。」<sup>⑱</sup>とあるように、権・実の概念によつて釈尊の教説を二分する考えを示している。涅槃經の所説が実（真実）とされ、それ以外の經教が権（方便）とされることは容易に推定される。<sup>⑲</sup>

以上、僧亮の教判思想を考察してきた。釈尊一代の説法を浅い教えから深い教えへの展開と捉え、涅槃經を最高の教えと位置づけたこと、その上で、法華經の開三顯一の思想に特別な注意を払つて釈尊一代の經教を三段階に分ける考えを示しているものの、全体の傾向としては涅槃經とそれ以前の經教に二大別し、今昔の兩説を、常・無常などの教理の対立か

ら整理したり、偏・円、権・実などの思想評価の概念を用いて整理していることが判明した。

1 道生の注については、拙稿『大般涅槃經集解』における道生注(『日本仏教文化研究論集』第五号、四天王寺国際仏教大學・総本山四天王寺刊、昭和六十年三月)を参照。2 僧亮の伝記は布施浩岳氏によって考証され、『高僧伝』巻七所載(大正五〇・三七二中)の京師北多宝寺に住した「釈道亮」に比定されている。『涅槃宗の研究』後篇(昭和十七年、叢文閣。昭和四十八年、国書刊行会)二三二―二四〇頁参照。3 『集解』のテキスト、撰者、構成については、拙稿『大般涅槃經集解』の基礎的研究(『東洋文化』第六十六号、昭和六十一年二月)参照。4 大正三七・三七七下。5 前同・四六二中―下。6 前同・四九三上。7 経序とは經典の題目を解釈したもので、巻第一に収められている。「僧亮曰、修多羅者、含五義。如經叙也。」(前同・四九四上)を参照。8 布施氏の前掲書はこの部分を解釈して「法華の涅槃は即ち法身般若なるのみなれば有為であり……」(二一六頁)と述べているが、問題がある。「故」は「ゆえに」ではなく、「もとより」の意である。9 2の注は、如来性品の「仏言、善男子。如百盲人為治目故造詣良医。是時良医、即以金鍼、決其眼膜。以一指示少見、見不。盲人答言、我猶未見。彼以二指三指示之。乃言、少見。」(大正一一・六五二下)に對するものである。10 大正一一・六九〇下―六九一上参照。11 大正三七・四九三上―中。五時教判といっても、後世の吉蔵が『三論玄義』(大正四五・五中)で慧観のものとして紹介する五時教判ほどには完成していない。12 釈尊の教えが小乗から大乘へと展開することについては、「初說小後說大、似如有隔。」(前同・四三三中)、「第四明昔小今大。」(前同・四九二上)を参照。13 「三藏」については、「謂三藏經、是小乘法藏、真是仏說。無此我相。」(前同・四六三下)を参照。「三乘雜說」については、「如來一道、隨大小乘根、広略為別耳。從一至九、是三乘

『大般涅槃經集解』における僧亮の教判思想(菅野)

雜說。」(前同・四八五下)を参照。14 前同・四七〇中。15 前同・五〇九中。16 前同・四七四中。17 前同・三八三中。18 前同・三八六中―下。19 前同・三九一中。20 前同・四〇一下。21 前同・四〇六下。22 「聞今伊字之譬、解仏昔說一切無常是方便也。而此方便、能斷三界未結。何快如之。」(前同・四〇二上)「學三界未結、顯無常教之功能也。」(四〇二中)「無常之教、乃學之始也。」(四〇六下)「偏說無常、常我自顯也。」(四四九下)等参照。23 「若以昔說為実、終不悟今教也。是故称名、寔其疑端。昔說一切空、今言不在、是可疑也。」(前同・四〇二下)「是即昔說無我、是実。今說自在、是虚也。如仏所說者、今昔皆是仏說。今說何必全是。」(四〇三下)「謂五陰皆苦、与昔教相連。以昔証今也。」(四八五中)「不相応者、今說八是道。昔不說八、応非道也。」(四八五中)を参照。24 前同・四一四中―下。25 前同・四六三中。26 前同・三八四上―中。27 前同・三八四中。28 偏・円に關する資料をいくつか列挙しておく。「三乘偏教、喻以半字也。」(前同・四三三中)「執先偏教、不信後說也。」(四五〇中)「末法邪惑、執偏教者、不受常說、譬水暴急不得度也。」(四七四下)「經旨不偏、理円可貴、喻之宝。」(四〇六中)「仏說勝修、円教可仰。以譬空中之月也。」(四〇七上)「鏡以表像、譬円教也。」(四五二下)「譬譬円教也。」(四五三中)など参照。29 前同・五七二下。30 本文引用①や、「双樹之說、真実之相也。」(四六三下)を参照。また、権実について、「智者見法、法理無二。謂仏說実不說権也。無智不見法故、仏說権道、謂道有権実說不定也。」(五七五下)「始學者、木有知見。是仮名菩薩、不達権道……」(五七六下)「為権教所覆、譬深水中也。」(四〇六中)を参照。31 僧亮の注として「所以四時經教、未出神明之妙体。唯就生死辺為論。」(前同・五三七上)があるが、「四時經教」「神明妙体」は宝亮の思想、用語であり、諸本の異同はないが、宝亮の注として本論の考察から除外した。

(付記) 本稿は聖德太子奉讃会への研究報告の一部である。

(東方研究会専任研究員)